ジャンマリア・オルテスの手沢本について

藤　井　盛　夫

Ⅰ　はじめに

今回，平成27年度日本大学経済学部在外研究員（短期）として，ジャンマリア・オルテス（Giammaria Ortes, 2.3.1713.-22.7.1790.）の手稿と手沢本の調査のため，ヴェネツィアのコッレール博物館附属図書館（La Biblioteca del Museo Correr）と国立マルチャーナ図書館（La Biblioteca Nazionale Marciana）を訪問した．以下はその調査報告とそれによって明らかになったことを論じたものである．

オルテスの手稿については，すでに前々稿に示したように膨大な量がコッレール図書館に所蔵されているが，前稿でも紹介したフランコ・ロンゴーニが編集した『俗論の誤り』の序文で，その手沢本がマルチャーナ図書館に所蔵されている旨を記しているので，まずそちらを訪問した．

マルチャーナ図書館は，サン・マルコ大聖堂に並ぶ総督館に面した建物の中にあり，古い手稿・手沢本は一般閲覧室に比べればかなり狭い，20席余りの手稿閲覧室（Sala di manoscritti）で閲覧することになっている．そこでオルテスの手沢本を閲覧したのだが，『俗論の誤り』の他に，ロンゴーニも言及していない『国民経済学』の手沢本，出版された『書簡集』の手沢本も閲覧し，さらに思わぬ掘り出し物もあった．まずそれらについて述べていきたい．

Ⅱ　オルテスの手沢本

手沢本（しゅたくぼん）とは，英語ではFavorite Book(s)と言い，著者が手元に置いている書物，いわゆる愛蔵本のことであるが，狭義には著者が手元に置いて訂正や加筆を書き入れた自著のことを指す．オルテスの『俗論の誤り』の手沢本は稀覯本を意味する記号を付した整理番号RARI 330のものである．白い羊皮で装丁された手沢本（恐らくオルテスによるもの）は外寸が縦280mm，横212mm，厚さ20mm，本体部分が270 × 205 × 13mmであり，前稿に記したイタリア各地で閲覧したものとほぼ同一である[1]．オレンジ色がかったクラフト用紙のような遊び紙をめくると，ロンゴーニも引用しているように標題紙にオルテスの自筆で“Confrontato col Ms.｜e correto dall' Aut.”（著者によって原稿と対照され訂正されたもの）と記されている[2]．ここでMs.(Manoscritto)とは手稿または自筆原稿の意味であるが，後の調査で明らかになるように，オルテスの場合，清書した自筆の完成原稿のことである．『俗論の誤り』の本文は，綴りの訂正を除けば，加筆は余り多くない[3]．『俗論の誤り』には正誤表がないので，『国

1)　ただし二つ折りにした小さい紙（1ページ当たり185 × 140mmと200 × 134mm，ロンゴーニの計測によれば184 × 141mmと199 × 133mm）の4ページのメモらしきものが二つ綴じ込まれているが，あまりにも小さい筆記体の文字は筆者には全く判読不能であった．

2)　以下の資料にも同じようにマルチャーナ図書館の旧称“Biblioteca Nazionale di San Marco, Venezia”（国立サン・マルコ図書館）の印が押されている．

3)　オルテスの訂正の仕方は，それが当時の普通の方法であったのかどうかわからないが，興味深い校正記号を用いている．前項に示したとおり，『俗論の誤り』(と『国民経済学』）の原本は奇数ページの右余白と偶数ページの左余白が広く取ってあり，見開きにすると印刷部分が中央上方に寄っている．オルテスは本文中の訂正部分を縦棒で消し，その行に該当するあたりの余白にやはり縦棒を引き，訂正を書き入れている．奇数

民経済学』の正誤表の形式で新たに正誤表を作成してみた（付録1）．そして本文の最終ページには“Venezia addì 16. Aprile 1771｜Io GM. Ortes.”（ヴェネツィア，1771年4月16日，私こと GM. オルテス）と自筆で記されている（これが出版日ということになっている）．

整理番号 RARI 329 が『国民経済学』の手沢本である．『俗論の誤り』と同じような白い羊皮の装丁で，外寸 280 × 220 × 47mm，本体 268 × 206 × 36mm である．やはり標題紙に“Confrontato col Ms.｜Originale e corretto｜dall' autore”（著者によって元原稿と対照され訂正されたもの）との記載がある．出版された『国民経済学』には誤植もさることながら綴りの誤り（これは活字を転倒させるなどした植字工のせいもあるが，多くは，例えば富を意味する ricchezze を richezze とするように，特に同じ子音が重なるときに一つを書き落とすオルテスの癖のせいであろう[4]）が非常に多いので，オルテスの訂正はかなりの量に上る．さらに加筆もあるので，『国民経済学』の正誤表には“Errori notabili”（主要な誤り）として主な誤りしか掲載されていない．同じ形式で改めて正誤表を作成してみた（付録2）．これらの訂正と加筆は，ロンゴーニ編の『俗論の誤り』とは違って，手沢本を閲覧したものがこれまでになく，『国民経済学』の後のリプリントには反映されていないので，イタリアのみならず世界初の公表である[5]．そしてやはり本文の最終ページには“Di

ページであれば，左から見れば本文中に縦棒，訂正，縦棒，また偶数ページであれば，縦棒，訂正，本文中の縦棒の順である．訂正が2字程度であれば1字1字縦棒で消し，長ければ横棒を引いて消している．「+」はトルツメの記号，挿入は単語と単語の間に「へ」の字を下に書き，余白にやはり「へ」の字を書いて挿入部分を記している．これらの他に用いられている校正記号はない．ただしこれらは手沢本での訂正なので，出版までに当時ゲラ刷りを校正するという作業があったのかどうかはわからない．しかしもしあったのであれば，『国民経済学』があれほど訂正だらけになることはなかったであろう．（ちなみに，ロンゴーニによれば『俗論の誤り』は発行部数200部の自費出版だったそうである．『国民経済学』の発行日，部数，自費出版か否かはまだよくわからないが，恐らく『俗論の誤り』と同様に自費出版だったと思われる．そうであるならば，その費用はだれが負担したのかという問題が出てくる．）

4)　しかし必ずしも綴りの誤りかどうか判定できない場合もある．それは例えばオルテスが訂正していない rinovare や rinuovare という動詞およびその変化形である．これは「更新する」（しかしオルテスの場合は「自己補塡する」とした方が適切であるように思われる）という意味の動詞で，現代では rinnovare と表記される．確かに名詞の形の rinnovo と rinnuovo は辞書に載っているが，発音しづらい語である．発音しづらいということは口に出して読みづらいということなので，演説や朗読には不向きである．イタリア語は書いたものを人に読み聞かせるのに向いた言語であるように思われるから，ことによるとオルテスが訂正していない18世紀のイタリア語はそのような二重子音の片方が落ちた綴りであったのかもしれない可能性は残る．

5)　なぜ世界初であるのかと言えば，マルチャーナ図書館の手稿閲覧室で閲覧する資料には“Elenco dei lettori che hanno studiato il manoscritto segnato”（下記の手稿を研究した読者のリスト）と印刷された大きめの（古いもの 342 × 240mm，2000年以降のもの 341 × 249mm）閲覧票が付いており，そこに順番，閲覧開始日，氏名，閲覧終了日，閲覧目的を記入しなければならず，ロンゴーニや前々稿で言及したモラートの名前が記入されているが，ロンゴーニは『国民経済学』を論じておらず，モラートは『国民経済学』を論じた本を書いているだけであるからである．『国民経済学』のリプリントには前々稿に示したように，クストディ版と経済学者叢書版があるが，それらは新字新かなに直しただけであり，さらに前稿執筆時には入手できなかったオスカル・ヌッチョ編の『国民経済学』があるが，ヌッチョは閲覧票には名前がなく，編集した『国民経済学』にもオルテスの書き入れは反映されていない．（それどころか，ヌッチョは上記の新字新かなではなく，勝手に断りもなく似たような綴りの単語に入れ替えたり，行を飛ばしたりして，かなり杜撰な編集をしている．もっともロンゴーニですら閲覧したのは『俗論の誤り』も『国民経済学』も1998年6月4日の1日だけであるので，たとえ1日に集中的にオルテスの書き入れをチェックしたとしても，『俗論の誤り』はまだしも，『国民経済学』については十分に検討したとは言えないであろう．ちなみに，モラートは『俗論の誤り』は1995年8月に4日間，『国民経済学』は1994年1月に1日だけ，この後に述べる『国民経済学に関する自筆書簡』は1992年7月に1日だけ，それぞれ閲覧しているが，オルテスの『各種著作』は閲覧していない．）

Venezia addì 20. Marzo 1773 | Io GM. Ortes.”（ヴェネツィアにて，1773年3月20日，私こと GM. オルテス）と記されている．（標題紙には1774年となっているので，これが出版日であるかどうかはわからない．）

ここで，オルテスが対照したMs.とはどのようなものであったのか．もしそれらが発見できれば，発想のヒントや推敲の跡がたどれるかもしれない．そのような期待を込めてオルテスのその他の手稿を検索していった．しかし，それがそうでないということがわかったのが，『国民経済学の著者の書簡集』の標題で出版されたものの手沢本（と手稿）である．

整理番号RARI 331-332は“Lettere autografe nell’economia nazionale”（国民経済学に関する自筆書簡）の標題で分類されており，サイズは270 × 196 × 20mmの一巻本である．中身は公刊されたオルテスの書簡集と自筆書簡である．これは，匿名で出版された『国民経済学』の著者に宛てた匿名の読者の手紙に対する返信の形で『国民経済学』を解説したものだけを集めたものであり（読者の手紙はない）それぞれの手紙の日付は『国民経済学』出版後の1777-8年と1783-7年のものである．『国民経済学』は著者名のみならず出版社名も書かれておらず，読者は誰にどうやって手紙を送ったのか，いささか怪しいところがあり，『国民経済学』に対する余りの反響のなさにオルテスが自作自演で出版したもののように思われた．しかしRARI 331-332に収録されているのは，確かにパンフレットとして発行された1783-7年の書簡（返信）4通と，“Avviso dell’autore”（著者の警告）の標題の序文を付した1777-8年の書簡8通であるが[6]，出版されなかった自筆書簡6通，『俗論の誤り』の別バージョンの正誤表とその他の書簡2通である[7]．これらの自筆書簡は280 × 190mmのサイズの紙の両面に，無地の便箋に付いてくる罫線の引かれた下敷きを用いて書いたかのように，標題部分は5行取り，1ページに27行ずつ書かれており，ほとんど訂正のない清書した完成原稿のように見える．オルテスは最初から完成原稿として執筆したとも考えられなくはないが，恐らくは下書きやメモなどがあったと思われる．しかしそれらは見当たらなかった．それゆえ，上記の期待は潰えたように思われた．

Ⅲ　未公刊の覚書

そんなときに1909年発行の*Catalogo dei Codici Marciani*（マルチャーナ図書館手稿本目録[8]）で発見したのがオルテスの手稿集である．この目録は通常の目録には掲載されていないイタリア語，ラテン語，ギリシア語などの古い手稿の目録で，そのイタリア語編の整理番号It., II. 138（=4916）にGiammaria Ortes［Opere varie］（各種著作）があった．これは303 × 220 × 42mmのサイズの一巻本に21編のさまざまなサイズの手稿が綴じ込まれているもので，その19番目に“Discorso sull’Economia Nazionale”が収録されている．これは280 × 190mmのサイズの紙に，やはり罫線を引いた下敷きを用いたかのように36行ずつ，両面に13ページ（目録では233a-243a）にわたって書かれている．しかし訂正が多く，加筆した紙が貼り付けてあるなど，上記の手沢本や手稿のよ

6）やはりその標題紙に“Confrontato col MS. primo, | e corretto dall’autore | e coll’aggiunto dell’altre Lettere MSS.”（著者によって元原稿と対照され訂正され，他の書簡の原稿を加えたもの）と記されている．

7）オルテスの自筆の目次（Indice）によれば，手紙はLett. IからLett. XIVまでと，その他2通が書かれているが，出版された1783-7年の4通は15番目から18番目まであり，やはり出版された1777-8年の8通は1番目から7番目までと10番目の手紙である．残りの8番目と9番目，11番目から14番目までの手紙が手稿（完成原稿）である．

8）100年以上前の古書であるから，当然のことながら中身はボロボロである．索引のページは裂けているし，裂けたページは薄い紙を表と裏に貼って補強してある．革の装丁はしっかりしているのだが，取扱注意の目録である．

うに，とても完成原稿には見えず，まさにメモ書きのようなものである．したがって，Discorso は演説とか論文と訳すのが普通であるが，これはまさに覚書なので，この手稿は「国民経済学に関する覚書」（以下「覚書」）と呼びたい．

この発見は，目録に記載されているので決して新発見ではないが，オルテス研究者の誰も引用していないので，これもまたイタリアのみならず世界初の引用の公表である．とはいえ，その筆写は，非常に小さな文字の筆記体のため，困難を極め（おまけにマルチャーナ図書館がコンピュータシステムの修理のために 2 週間休館したこともあり），最初の 4 ページほどしか終わっていない．癖のあるオルテスの筆記体は非常に読みづらく，慣れるまで時間がかかる．しかしそれでも「国民経済学は一国のすべての人が十分快適で心地よく生存するための財を供給する科学である」（233a）[9] で始まり，「国民とは…」，「財とは…」と用語を定義する第一章，「上記の国民経済学は人間が考案した科学であり，この一世紀足らずの間に導入されたものと言えよう」で始まる第二章など，その後の（と思われる）『俗論の誤り』や『国民経済学』に発展していく内容が見られる．ただし「覚書」には日付がないので，それらの著作の後に書かれたものであるかもしれない．しかしこの「覚書」は 1751 年に書かれた 18 番目と 1750 年に書かれた 20 番目の手稿の間に綴じ込まれており，手稿全体で日付のあるものはほぼ 1740-50 年代のものなので，やはりそれらの著作の前に書かれた準備稿のようなものであったと推測しても差し支えないであろう．

このわずかな「覚書」の解読から言えることは，『俗論の誤り』に見られるように，そしてまだ十分検討していない『国民経済学』にはより鮮明に見られるように，ピエロ・スラッファの『商品による商品の生産』の「自己補塡的状態」や「生存可能性」に通じる経済体系の生存，そして持続可能性の概念をオルテスが最初から持っていたということである．したがって，オルテス，オルテスを（再）発見したパンタレオーニ，パレート，バローネ，スラッファという一連の流れが，少なくともイタリアのある一派の経済学には存在するように思われる．（もちろん，イタリアのこれまでの経済学がすべてそのようであるわけではない．まだ十分検討していないが，よく引用される上記の書簡集の中の 16 番目の手紙に，オルテスが影響を受けた経済学者として，ロック，モンテスキュー，ジェノヴェージ，ヒュームの名前が脚注に列挙されれているが，実はオルテスはこれらの学者には影響を受けたのではなく，本文では経済学に誤りをもたらした学者としてその頭文字を列挙している．したがって，とりわけ当時の経済学の代表者であるジェノヴェージの経済学に対するアンチテーゼとして『国民経済学』また『俗論の誤り』が執筆されたと言えよう[10]．これはマーシャルを批判して 1925 年と 1926 年の論文を書いたスラッファとよく似ている．持続可能なオープンマクロ経済モデルを推計した『国民経済学』が対抗したもの

9)　「快適で心地よく」というのは原文は “comodamente e piacevolmente” である．どちらも「快適な」という意味の副詞であるが，オルテスは副詞に限らず，名詞，動詞，形容詞も同じ意味の単語を並べて強調する癖がある．そのためそのような同義異語の逐語訳をしようとすると訳語の選定に困ることが多い．

10)　念のため，16 番目の手紙（1784 年 11 月 13 日付）では，「私が自著で常に仮定した真実，すなわち雇用は消費可能な財に等価であること，そして消費可能な財は一国においてそれと交換される貨幣と等価であること」⑵が示され（これがオルテスの三面等価の原則であり，実は『俗論の誤り』には貨幣および利子の議論は出てこない），「私がここで誤りであることをあなたに示そうと決意したのは，あなたの困難に答えるためだけではなく，そこから生じ，貨幣と全体の経済の科学を体系化する際に多くの過ちを犯したこの時代の非常に著名な経済学者 (*) L, M, G, H. や他の多くの人々によってもたらされた他の多くの誤りの源泉を同時に明らかにするためでもあります」⑷と書かれ，その註 (*) として「ロック？，モンテスキュー，ジェノヴェージ，ヒュームら」と書かれている．ちなみに，宛名は公刊されたものでは匿名になっているが，ファエンツァの神父 P. D. ゼノービ・カレーニである．

は何だったのであろうか．ジェノヴェージの経済学はミクロ経済学として読めるのであろうか.）

Ⅳ　むすびにかえて

今回の在外研究では世界初のこと（うち一つは未完であるが）を含め非常に多くの収穫があった．今後はヴェネツィア滞在中に完了した『国民経済学』の二度目の（一度目は挫折した）翻訳を再度訳し直して『国民経済学』について検討し，出版された『国民経済学』が実は「第一部」であるので，「第二部」の草稿は存在するのか，『俗論の誤り』と『国民経済学』との関係はどのようになっているのか，さらにオルテスについての数々の先行研究についても検討しなければならない．「覚書」についての検討は筆写し終えてからのことになる. 検討すべき事柄はまだまだたくさんあるが，筆者の研究はまだ緒に就いたばかりである[11]．

---

11)　本稿はマルチャーナ図書館の思いがけないシステム修理のための休館とコッレール図書館の理由のわからない休館の期間を利用して書かれたものである．その間，参考のため持参したロンゴーニの序文を少し詳しく読む余裕があったので，上記の今後の研究についての思いつきを予想してみた．ロンゴーニの編集した『俗論の誤り』はオルテスが 1771 年 4 月 16 日に出版したとされる『国民経済学に関する俗論の誤り』と，ヴァチカン図書館とミラノのマッティオーリ財団に所蔵されている手稿の『各国の政府に関する俗論の誤り』を収録している．ヴァチカン図書館の手稿には 1772 年 5 月 4 日の日付があり，マッティオーリ財団のものは標題紙に“Parte Prima”（第一部）とインク書きされた『国民経済学に関する俗論の誤り』と，やはり 1772 年 5 月 4 日の日付がある手稿が綴じられているそうである．そこでロンゴーニは 1771 年の『俗論の誤り』を第一部とし，それらの 1772 年の手稿（恐らく完成原稿であろう）を第二部とし，第二部がなぜ出版されなかったのかを推理し，その理由を出版許可が得られなかったからとする．実際，『俗論の誤り』（第一部）も『国民経済学』も，著者名も出版社名もどこにも記載されていないが，標題紙の一番下には“CON LICENZA DE’ SUPERIORI”（当局の許可を得て）と印刷されているから，匿名出版といえども許可は必要だったのであろう．しかし筆者の見解は少し違う．それは『俗論の誤り』は第一部にも第二部にも貨幣の議論がないからである．貨幣の議論は『国民経済学』の最終編の第六編「貨幣に等価な財について」で出てくるものである．しかもこれは筆者の感触なのであるが，第五編「資本と所得とみなされる財について」の初めの方，この編の全 23 章中第五章あたりから，それ以前と比べると文体が急に難しくなっていて，空白の期間があったため文体が変化したように思われた．つまり『俗論の誤り』は『国民経済学』第五編の途中で『俗論の誤り』（第一部）の副題にある「俗人と聖職者の間の現下の論争」が起こり，それに対してオルテスが『国民経済学』の応用として執筆したのではないかと思われる．『国民経済学』の序文には，同書の執筆には 10 年かかった旨が記されている．つまり 1774 年の 10 年前，1764 年から，しかし本文にはそれ以前の統計資料が引用されているので，もう少し前から（ことによると「覚書」に基づいて）書き始められたものと推測される．『俗論の誤り』（第一部）の序文にはいつから書き始められたかの記載はないが，『国民経済学』執筆開始以前に書き始められたとすれば，10 年以上前に起こった論争を「現下の論争」とは言わないであろう．さてそれでは『国民経済学』の標題紙に記されている“Parte Prima”はどのように解釈すればよいのであろうか．『国民経済学』第一部は上にも示したように，持続可能なオープンマクロ経済モデルを推計したもの，もう少し詳しく言えば，当時のイタリアをモデルにした，周辺を諸外国に取り囲まれた人口 300 万人の架空の国が生存可能な経済の標準体系を示した雇用・利子および貨幣の一般理論である．そしてヴェネツィア滞在中に訳了した同書第六編の最後は，「この［個人の債権・債務］問題は，債務が一国のその国自身との債務であるか他国との債務であるかによって異なるであろうし，そのような債務については，もし財政が問題になるならば，論じられるであろう」（411，［ ］内引用者）として第一部が結ばれている．それゆえ，理論編とみなされる第一部に続く第二部としては応用編または政策編となることが予想され，そこでは国家財政や統治形態などが論じられることになろう．ということは当然，教皇領についても触れることになり，教皇領の財政や統治形態が論じられることになるであろう．『俗論の誤り』（第一部）はもともと実践的な事柄を『国民経済学』（第一部）の理論で分析したものであると思われるが，『俗論の誤り』（第二部）が実践的な統治形態を分析することになれば，やはり教会にとって都合の悪い部分も出てくるので，出版許可が下りなかったのは理解できる．しかし『国民経済学』（第一部）は純粋理論なので，もし『国民経済学』第二部の完成原稿があれば，出版が許可される見込みがある．しかし『国民経済学』（第一部）はイタリアをモデルにした理論書であるとはいえ，い

Venezia, 13. 8. 2015.

（本稿は平成 27 年度日本大学経済学部在外研究員（短期）の成果の一部である.）

参考文献

藤井盛夫,「ジャンマリア・オルテスについて――その予備的研究――」,『経済集志』第 83 巻第 3 号，2013 年 10 月，pp.27-34.

藤井盛夫,「ジャンマリア・オルテス『俗論の誤り』について―― 18 世紀のマクロ経済学――」,『経済集志』第 84 巻第 2 号，2014 年 7 月，pp.19-24.

Longoni, Franco, “Introduzione”, in *Giammaria Ortes Errori popolari intorno all’economia nazionale e al governo delle nazioni*, Riccardo Ricciardi editore, 1999, pp. VII-XXXII.

Ortes, Giammaria, *Della economia nazionale*, a cura di Oscar Nuccio, Marzorati editore, 1970.

つでもイタリアの現実の経済政策に転換できる両刃の剣であるため，『国民経済学』（第二部）が第一部に基づくのであれば，教会はただでさえ「現下の論争」に敏感になっているので，いくら架空の国のお話であると言っても通らないであろう．したがって，『国民経済学』（第二部）は原稿があったとしても出版を差し控えたというのが筆者の現時点での見解である．このような思いつきを上に列挙した今後の研究のどこかで論じることになるであろう．ロンゴーニの序文だけからの思いつきなので，『国民経済学』を論じたモラートの見解を確かめなければならず，もう少し調査を進めなければならないけれども，現時点での予想が妄想にすぎなければ，それもまた筆者の喜びである．

付録１：『俗論の誤り』正誤表

頁	行	誤	正
i	15	pare-	par-
viii	3	Dav. Salm.	Dav. Salm. 118.
2	28	abitazione;	abitazione,
8	18	frà	fra
9	21	frà	fra
	27	frà	fra
10	34	frà	fra
13	28	rà	fra
14	12	hà	à
18	23	transito;	transito,
24	3	fà	fa
53	1	chi non li	chi li
54	15	restando non	non restando
91	4	altri all' istesso	altri poveri all' istesso
	17	esigersi anzi	esigersi dagli ecclesiastici anzi

付録２：『国民経済学』正誤表

頁	行	誤	正
viii	7	impo-	impos-
	26	tallora	talora
	42	impo-	impos-
ix	15	anzichè. un vicino un sia	anzichè un vicino, un sia[1]
x	42	sempte	sempre
xiii	1	medessime	medesime
	14	acortezza	accortezza
xiv	16	introddotto	introdotto
	30	ogetti	oggetti
xv	3[2]	dalla verità della menzogna	della verità dalla menzogna
xviii	15	ìn	in
2	31	addottate	adottate
5	3	matoni	mattoni
6	17	communemente	comunemente
	18	raddolcindo	raddolcendo
8	26	estragono	estraggono
10	33-4	quì d' Italia della quale intendo di favellare più particolarmente	e del clima sotto al quale io mi trovo
	34-5	quanto agli incapaci a motivo	quanto agli incapaci a occuparsi a motivo
11	1	nella Capitale di essa	in questa Capital di Venezia

1) この anzichè に限らず，以下に出てくる sè，また本文中の他の語でもオルテスは閉口音アクセントのある e（é）を開口音アクセント記号の付いた è と区別していない，そのような使い分けをしない方法もあるので，ここではいちいち注意せずに，オルテスが訂正したまま記すことにした．

2) 行番号に下線が引いてあるのは『国民経済学』出版時の正誤表に記載されたものであることを示す．

12	9	danno	dànno
16	19	occorreser	occorresser
26	2	camino	cammino
27	7	preferisse	preferisce
28	13	(*a*)	(*a*) L. I. c. 9.
30	11	essi	esso
31	3	patache	patate
	25	qual	quale
33	5	intendesi	intendersi
41	2	concorresero	concorressero
46	30	avvanzerà	avanzerà
48	5	fà	fa
	32	alettando	allettando
	34	Ed	ed
49	22	alettamento	allettamento
54	31-3	e le cui maniere son più conformi alle mie, e a quelle degli altri ai quali principalmente intendo di favellare	come quelle fra le quali son nato e per lo più avvezzo e educato, e delle quali insomma nello stato mezzano io son uno
55	28	semprc	sempre
	33-4	più greve, usata fra le persone prese come sopra in considerazione	detta grossa in Venezia
58	27	Filatici	Filaticcj
60	26	palaggi	palagi
61	6	matoni	mattoni
62	32	estra-	estrag-
64	2	primi	primi,
69	24	danno	dànno
72	19	dis-	di-
74	35	tagliano	taglino
75	23	asciuta	asciutta
78	26	ortaggie	orti
80	29	acurate	accurate
83	25	estragono	estraggono
84	28	s' ascrivino	s' ascrivano
90	1	un	un'
92	16	produranno	produrranno
	17	produranno	produrranno
93	6	scegua	seegua[3]
96	1	100.	1000.
97	1	per	che per
98	6	quello	quegli
99	19	disotterar	disotterrar
101	13	maritime	marittime
	29	diseminati	disseminati
102	6	3 000000.	3.000000.
	15	fi	si
103	5	diverfe	diverse
104	10	to	fetto
106	32	estragono	estraggono
108	2	occorrono	occorrano
110	4	pressiedono	presiedono

3) segua の誤りであろう.

	7	sopraintenda	soprantenda[4]
111	8	fachino	facchino
112	35	pighi	pigi
115	22	riccorrere	ricorrere
116	9	artotini	arrotini
117	8	affacendate	affaccendate
	9	affacendate	affaccendate
	13	disseccarle	diseccarle
119	23	600000⅓	600000.⅓
120	7	soprintendono	soprantendono
	21	printenda	prantenda
121	8	ragiro	raggiro
	16	affacendati	affaccendati
	17	fachino	facchino
	33	affacendati	affaccendati
122	33	con	col
124	32	adotte	addotte
125	31	patuiscono	pattuiscono
129	10	fachini	facchini
	19	l' essere i tras-	l' essere nel presente caso i tras-
	21	capitale,	capitale marittima tutta intersecata da canali,
	28	fachini	facchini
	29	mulatieri	mulattieri
133	10	ragiri	raggiri
	25	camino	cammino
134	16	30000000½	30000000.½
19		forastieri	forestieri
135	28	soldato che	soldato miserabile e vano che
137	19	ecclesiastica, secolare	ecclesisitica, o secolare
139	26	catte-	cate-
140	25	supgongo	suppongo
144	18	forastiere	forestiere
145	31	maritimi	marittimi
150	32	nella nazione proposta	(Brescia e suo territorio)
151	9	Carettieri e Mulatieri	Carrettieri e Mulattieri
152	24	se	sè
153	4	se	sè
	12	pranso	pranzo
154	5	verò	vero
	22	curi	sappia
155	32	nnmero	numero
158	21	guisacchè	guisachè
159	11	dettrarre	detrarre
163	8	eosì	così
164	19	riffuggio	rifugio
165	19	flessibili:	flessibili;
166	2	afluenza	affluenza
167	5	contradditorio	contraddittorio

4) 以下に出てくる動詞 sopraintendere の活用形 sopraintenda や sopraintendono をオルテスは soprantendere を活用させて書いている．あるいはそういう語もあったのかもしれない．

	31	moteggiare	motteggiare
	34	aggiati	agiati
168	6	altri	altre
	28	menro	mento
169	32	doversene	dovervene
170	20	sbaglio	isbaglio
171	21	un	un'
	25	dell' altra;	dell' altra,
		cristiane,	cristiane;
	34	n' anno	n' ànno
172	12	v' anno	v' ànno
173	2	altto	altro
	28-9	d' Impostori	di Cabalisti
	31	parasciti	parassiti
174	1	impostore	cabalista
	9	l' impostura	la cabala
	12	volgono	volgano
	14	debolezza, del	debolezza del
	16	mercimonio, d' anire	mercimonio d' amore
175	9	occupati, non	occupati non
	11	all' impostura	alla cabala
	26-7	l' impostura	la cabala
177	5	estragono	estraggono
	15	coreggere	correggere
	17	coreggere	correggere
178	30	dilattata	dilettata
181	4	si nutrisse	si si nutrisse
182	9	equivalgono	equivalgano
	11	valgano	valgono[5]
	21	occupazione	occupazioni
183	21	equivarebbero	equivarrebbero
184	5	equivalgono	equivalgano
	6	equivalgono	equivalgano
	13	occnpazioni	occupazioni
	22	numerò	numero
	30	agricollura	agricoltura
186	12	abjetto	abbietto
	31	incomensurabile	incommensurabile
188	21	ricerchè	ricerche
189	11	dererò	dero
	12	rendan	rendono
	17	se	sè
	25	anzi	ami
190	11	scnza	senza
	27	n' anno	n' ànno
191	6	dnnque	dunque
192	9	aletta	alletta
	15	e	è
	24	l' arrichisse	l' arricchisce
193	5	nna	una
	16	stenda	tenda

5) 本文中の章の標題の誤りであるが，目次では（equi-）valgono に直っている．

	19	che non si sappia di	di che non si sappia
194	4	influisce	influisse
	7	euorepee	euoropee[6]
	31	ehe	che
196	21	efficaccia	efficacia
197	29	dì	di
199	18	affacendati	affaccendati
	20	facende	faccende
	22	Affirica	Afirica[7]
	24	afluenza	affluenza
200	16	Dimanieraehè	Dimanierachè
	20	ttovin	trovin
201	1	avvanzi	avanzi
	9	spinto	ispinto
	26	naturà	natura
202	12	essa	esse
203	20	dispostis-	dispotis-
	24	stabilir che	stabilir e che
204	1	popoli, li-	popoli li-
205	13	rimmarrà	rimarrà
207	32	dalle	delle
208	20	s' avvanze-	s' avanze-
	32	pupolate	popolate
	34	terte	terre
209	2	Dacchè	Dal che
	5	avvanzarsi	avanzarsi
	17	12.000000. campi	12.000000. di campi
210	1	viddero	videro
	32	battin	battan
211	2	rerre	terre
	13	commerciò	commercio
212	6	ehe	che
	13	matoni	mattoni
213	22	suppongono	suppongano
215	10	Con ciò non si niega che[8]	Ciò si dice non perchè
	32	v' anno	v' ànno
	33	chc	che
216	6	nniversale	universale
	8	effere	essere
	35	segalla	segala
217	15	di	de' suoi
	26	fi	si
	30	nfficj	ufficj
218	22	di	de'
221	3	sui	su certi[9]
	31	della	dalla
222	7	fia	sia
	23	difonderle	diffonderle

6) europee の誤りであろう.

7) Africa の誤りであろう.

8) 正誤表では誤りの部分が Con ciò non si nega che となっている.

9) 224 ページにも出てくる本文中の章の標題の sui から su certi への訂正であるが, 目次では sù certi となっている.

	24	poffibile	possibile
223	22	fimili	simili
224	5	sui	su certi
	22	inrervengano	intervengano
225	7	teni	reni
226	21	potentati	potenti
	28	pet	per
227	4	conftontate	confrontate
	14	forse	fosse
	23	valgono	valgano[10)]
	29	equivalgono	equivalgano
230	3	possedon	possedan[11)]
	3	equivaranno	equivarranno
	11	entrambo	entrambi
	32	dirfi	dirsi
231	28	se	sè
232	19	ripetterne	ripeterne
	23	a lui	lui
	31	valgono	valgano
233	2	possono	possano
	7	quaifivoglian	quaisivoglian
	34	facende	faccnede
234	30	crescono	crescano
236	34	afiatiche	asiatiche
240	20	liberà	libera
241	33	s' acquistano	s' acquistino
243	28	pin	più
	34	adossar	addossar
245	22	stabilita.	stabilita,
248	27	dalla	colla[12)]
249	30	por	porne
251	29	presetvata	preservata
252	11	oltrecciò	oltreciò
254	28	varanno	varranno
255	21	manl	mani
257	20	marchia	marcia
	23	quello	quegli
	24	questo	questi
259	14	arrar	arar
262	5	possedan	possedon
266	9	inavertenza	inavvertenza
268	1	effendo	essendo
	13	ne	nè
	18	ventinajo	ventina
270	4	sulla	sulle
271	26	equivalgo-	equivalga-
274	14	proviggioni	provvisioni

10)　本文中の章の標題の誤りであるが, 目次では (equi-) valgano に直っている.

11)　本文中の章の標題の誤りであるが, 目次では possedano になっている.

12)　dalla から colla への訂正であるが, 目次では colla に直っている.

279	30	dettrattone	detrattone
281	19	possono	possano
293	17	avvovati	avvocati
294	25	s' eglino altri	s' eglino o altri
297	8	meccanica, e di	meccanica, di
299	16	addattarsi	adattarsi
300	14	rinascono	rinascano
302	24	parricolare	particolare
303	17	arrchindo	arricchendo
	23	esse non	esse, non
305	15	malvaggio	malvagio
307	14	litiggi	litigi
311	11	che	due
	22	per un contratto	per contratto
	26	soprafazione	sopraflazione
315	33	rallogismi	ralogismi
318	27	comensurabili	commensurabili
319	11	cosu-	consu-
	28	consumate:	consumate;
320	22	tarsi:	tarsi;
321	20	corrutibile	corruttibile
	23	danno	dànno
324	13	disagiato:	disagiato;
	14	provveder	proceder
	21	sì	si
	24	siegue	segue
334	29	maranno	marranno
335	26	arrichiscono	arricchiscono
337	6	lui	egli
	7	ei resti-	resti-
	9	capara	caparra
338	31	capara	caparra
339	6	capara	caparra
341	25	un	un'
342	5	un	un'
	27	scorra	scorre
343	28	dettrattane	detrattane
344	18	l' afluenza	l' affluenza
	33	l' afluenza	l' affluenza
346	22	compette	compete
	24	competta	competa
	31	se	sè
	33	sequel-	seque-
353	31	qualuque	qualunque
354	8	tallora	talora
	26	se	sè
359	3	addurà	addurrà
	6	affacendati	affaccendati
	24	tracia	traccia
	29	che nell'	a quelli dell'
360	4	frà	fra
	9	sc	se
361	27	meno	più
363	3	galleoni	galeoni

	25	fora-	fore-
	27	alettamenti	allettamenti
365	10	arrichiranno	arricchiranno
367	33	equivaranno	equivarranno
368	20	stabile, particolare almeno	stabile particolare, almeno
371	3	o sian	o che ne sian
	8	alettato	allettato
372	14	strugerebbe	struggerebbe
374	1	nuocia	nuoccia
	5	pusilanimi	pusillanimi
	21	ricchiede	richiede
375	6	dacche	dacchè
	14	lentemente	lentamente
377	13	gabar	gabbar
381	34	danno	dànno
382	1	tratto al-	tratto, al-
	21	facende	faccende
384	28	fibie	fibbie
386	18	questi	questo
390	17	gabano	gabbano
	18	gabano	gabbano
392	20	anno	ànno
394	28	Nicolino	Niccolino
397	21	nuocia	nuoccia
399	28	alettati	allettati
400	17	accorato	accurato
402	33	affinche	affinchè
406	11	diveranno	diverranno
	14	riguarda	riguardo
407	9	esigan	esigon
408	26	avve-	avver-